

荒れ野の 40 日 40 夜

マタイによる福音書 4 : 1 - 11



司祭 ヨハネ 井田 泉

大齋節第 1 主日
2026 年 2 月 22 日

京都聖三一教会にて

大斎節に入りました。今日から6週間後のイースター（復活日）を目指しつつ、この時を歩んでいきましょう。主イエスの荒野での40日の試練を思い、わたしたちの生きる姿勢、信仰のあり方をあらためて整える時としたいと願います。

イエスが公の働きを開始されたのは30歳の時でした。その働きの準備と言えば、誕生から宣教活動までの30年全体が準備期間だったと言えるでしょう。けれどももっと狭く絞るならば二つです。イエスのヨルダン川での洗礼と、今日の荒野での40日の誘惑の二つがそれです。イエスがご自分の生涯を賭けて、命を献げて活動をなそうとするとき、この二つがどうしても必要だったのです。

第1の備えは洗礼でした。イエスが洗礼を受けられたとき、神の霊が降ってイエスに宿りました。神の力を受けられたのです。同時に、天から神の声が呼びかけました。「あなたはわたしの愛する子」。神の愛と力、神の命がイエスの存在と働きを根本から支える。これが第1の備えです。

そして第2の備えは、今日の福音書。荒野での悪魔の誘惑。40日40夜にわたる孤独と苦しみ。恐ろしい苦しみの中での祈りと忍耐、そしてその克服の経験です。

この二つの備えがあってはじめて、イエスの働きは実現したのです。

今日の福音書の最初を読んでみましょう。

「さて、イエスは悪魔から誘惑を受けるため、“霊”に導かれて
荒野に行かれた。」マタイによる福音書 4:1

ここで気になるのは、イエスが荒野に行かれたのは「悪魔
から誘惑を受けるため」、そして「“霊”に導かれて」と書かれて
いることです。「悪魔の誘惑」と「神の霊の導き」が並んでいます。
ここには二重の面があるのです。

個人的なことを言えば、わたしは今から 50 年前の神学生時代に
神さまを見失って非常に苦しんだことがありました。その時、
悪魔の誘惑、サタンの恐ろしい力というものをほんとうに感じ
ました。イエスに襲いかかった闇の力とはこうだったかと思
いました。それですから「悪魔から誘惑を受けるため」と書かれて
いるのはわたしには非常に現実性があります。けれどももう
一つ、「“霊”に導かれて」とあるのは、それほど深くは考えて
きませんでした。けれども今回、これが気になったのです。

もしだれかが（自分が）この世界で真実に生きていきたいと
本気で願うとすれば、葛藤が生じるでしょう。自分の中にも、
そして外との間にもです。もう少し率直に言えば、世の中の力
ある人たちから圧迫されたり迫害されたりすることが起こるで
しょう。イエスの場合がまさにそれでした。「悔い改めよ、天の
国は近づいた」と叫んだ洗礼者ヨハネ、イエスが洗礼を受けた

そのヨハネは、やがてガリラヤの領主ヘロデに殺されることとなります（マタイ 14:10）。イエスは、公の活動を始める前に繰り返し聖書を真剣に読んで生きてこられたでしょう。聖書から、苦しみつつ働いたかつての人々のことを思い、どのようなことがあってもその人々の精神を受け継いで神さまのために働かなければ、と誓われたはずです。その中でもとりわけ二人のことがイエスのうちに大きな位置を占めていたのではないかと思います。

その一人はモーセです。彼は 40 歳のときにエジプトから逃れてミディアンの地で 40 年間羊飼いとして暮らし、80 歳のときに神から召命を受けました。モーセは命をかけてエジプトから苦難のうちにある同胞を脱出させ、神の山ホレブに人々を導きました。そして彼は、人々を待たせておいてひとり山に登り、40 日 40 夜を山で過ごしました（出エジプト記 24:18）。そうして神から十戒を刻んだ石の板 2 枚を受けて戻ってみると、人々は金の子牛を拝んで躍り狂っていた。モーセは怒りのあまり金の子牛と十戒を刻んだ石の板 2 枚をたたき壊しました。後にモーセは当時を回想してこう言います。

「あなたたちのすべての罪のゆえに、わたしは前と同じように、40 日 40 夜、パンも食べず水も飲まず主の前にひれ伏した」
申命記 9:18

ホレブの山での 40 日 40 夜が 2 回出てきます。モーセは二度

も、神の前の 40 日 40 夜を経験したのです。

もう一人、イエスが深く心にとめたに違いないのは預言者エリヤです。エリヤは人々を神に立ち帰らせるためにバアルの預言者 450 人と対決し、それに勝利しました。ところがかえって命を狙われることになり、あのモーセの山ホレブを目指して逃亡します。なぜホレブを目指したか。400 年前にモーセが神と出会った山がホレブだったからです。しかし途中で彼は荒れ野で疲れ果てて、もう限界だと思いました。

「彼は一本のえにしだの木の下に来て座り、自分の命が絶えるのを願って言った。『主よ、もう十分です。わたしの命を取ってください。わたしは先祖にまさる者ではありません。』」

列王記上 19:4

彼は死ぬことを願ったのです。

少し続きを読みましょう。

「見ると、枕もとに焼き石で焼いたパン菓子と水の入った瓶があったので、エリヤはそのパン菓子を食べ、水を飲んで、また横になった。主の御使いはもう一度戻って来てエリヤに触れ、『起きて食べよ。この旅は長く、あなたには耐え難いからだ』と言った。エリヤは起きて食べ、飲んだ。その食べ物に力づけられた彼は、四十日四十夜歩き続け、ついに神の山ホレブに着いた。」 19:5-8

エリヤは 40 日 40 夜、神を求めて苦しい旅をした。そしてホレ

ブの山でエリヤは静かにささやく神の声（19:12）を聞きました。そして新しく力と使命を与えられて戻って行きました。

モーセとエリヤの 40 日 40 夜は、イエスの 40 日 40 夜とつながります。

「イエスは、四十日間、昼も夜も断食した後、空腹を覚えられた。」 マタイ 4:2

エリヤから 900 年の後に登場したのがイエスです。神の願いをご自分の身に受けて、主の僕として生き、人々を救おうと願われたイエスが、モーセのこと、エリヤのことを思わなかったはずはありません。モーセの 40 日 40 夜、エリヤの 40 日 40 夜を思うとき、イエスも、自分の働きを始める前に、40 日 40 夜の祈りの時が必要だと感じられたのではないのでしょうか。

頭で考えて判断したというより、心の奥底に湧き起こってそのように自分を促す内的促しがあって、イエスは祈るために荒れ野に行かれた。それを福音書は「**イエスは…… “霊” に導かれて荒れ野に行かれた**」と伝えています。神の霊に動かされるというのは、自分には何の考えも葛藤もなしに、機械的に運ばれるということではありません。葛藤と祈りのうちに決意が起る。そのように神の霊が働かれる、ということではないでしょうか。

40日40夜断食して、イエスが経験された誘惑とは何であったか。それは、神に仕え人々を救おうとされるイエスの決意をくじくことです。神から自分に与えられた道からそれること。神からの使命を放棄する、諦める、あるいは裏切ることです。

たとえば悪魔が勧めたように、神殿の屋根の端から飛び降りたらどうでしょうか。無事であれば、そこに密集している人々の驚嘆と喝采を受けることになります。英雄になって人々を引きつけることができる。これは危うい誘惑です。

40日40夜の荒れ野で、イエスはモーセの40日40夜、エリヤの40日40夜を深く思いめぐらし、祈られたことでしょう。

イエスはすべての誘惑を退けられました。「……と書いてある」（マタイ 4:4、7、10）と言われたように、聖書の言葉によって誘惑を克服されたのです。そして荒れ野を後にして故郷に帰ってこられます。ルカ福音書はこう伝えています。

「イエスは“霊”の力に満ちてガリラヤに帰られた」4:14

神の霊はイエスを荒れ野に導いた。荒れ野において神は姿を隠しておられたけれども、今や神の力と命が、はっきりとイエスを生かしているのです。それはイエスご自身も感じ、わかる人にもわかるほどでした。

もしわたしたちが誘惑に遭うなら、イエスが支えてください

ます。イエスから離れないなら、イエスが誘惑に勝たせてくださいます。神の霊が導いてくださいます。そしてわたしたちもイエスとともに、神から与えられた道をしっかりと歩む者とされます。

お祈りします。

主イエス様、あなたがわたしたちの支え、導き、またわたしたちの命です。どうかわたしたちが誘惑に遭うとき、弱ったとき、わたしたちを守ってください。そうして新しくあなたとともに主の道を歩ませてください。わたしたちのために苦しみを受け、それに打ち勝たれたあなたに感謝と讃美を献げます。アーメン